

生徒の進路観を育成するには、低学年次の職業や学問などに対する視野を広げさせる

指導が有効とされる。教師によるガイダンスにとどまらず、職場訪問や大学教授による講演会、さらに生徒自身による調べ学習など、工夫を凝らした取り組みを行っている高校も多い。

それらの取り組みを行う際に、多くの教師が配慮しているのが、いかに「過性のイベントで終わらせず、指導の成果を有機的に連携させていくか、という点のようだ。生徒個々が指導を通して獲得した進路情報や、新たに生じた疑問などを日々の生活の中で生かし、また考えていければ、自分の将来に対するこだわりを強く持つようになる。その結果、自己実現に向けて日々の教科学習に対する意欲も自ずと高まっていく。

佐賀県立致遠館高校では、1年次を進路観確立の時期と位置付け、12月の文理選択に向けて職業、学問、さらに大学への意識を高めるための指導を行っている。LHRを活用した具体的な取り組みは、社会人による進路講演会、大学教授の学問講演会、卒業生による講演・懇談会、オープンキャンパスへの参加など多種多様だ。

「1年次の進路学習は、自分がどんな職業」「担任の個性で指導内容に付加価値は付けていくべきですが、致遠館高校として、最低限ここは押さえておこう」という部分を教師間で共有化することは重要だと思えます」(松尾先生)

進路連絡会で指導をつなぐ

だが、いくら進路指導の仕掛け、取り組みを充実させても、生徒を動かすにはそれだけでは限界がある、と松尾先生。生徒一人ひとりの日常生活を具体的に変えていくためには、より個を意識した指導が必要になってくる。

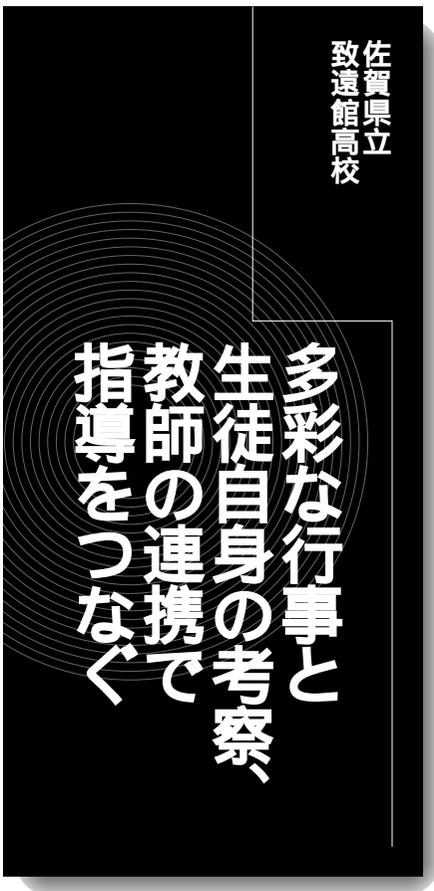
同校では学年別に担任、学年主任、校長、教頭、進路指導主事の松尾先生、そして教科担当を含めた進路連絡会を実施する。第1学年は5月、9月、10月、1月の年4回だ。

「5月の進路連絡会では、生徒が高校生活に適応しているか、中学校での学習の違いをきちんと理解しているかなど、一人ひとりについて検討していきます。高校に合格したことで安心してしまったり、中学校との違いに戸惑っている生徒も中にはいます。そこで、進路や学習の目標を持たせるにはどうすればいいのか、家庭学習の習慣を身に付けさせるにはどんなアドバイスがよいかを議論していくのです。9、10月は文理選択を前にした生徒の状況、1月は学部・

学問について興味があるのかを考えることから始まります。しかし、そもそも最近の生徒は進路に関する情報を多く持っているとは言えず、意識も高いとは言えません。そこで、いろんな分野で活躍している方々の話を聞かせ、自分な

「身近に感じる年代の人の体験を聞くことで『進路はこう考えていくんだ』『自分もやればできるんだ』と思わせることがねらいです」(第1学年主任・渡辺孝一先生)

佐賀県立致遠館高校



らっていくか」と考えてみるような機会を数多く設けました(進路指導主事・松尾敏実先生)

生徒自身に考えさせる

卒業生の講演・懇談会は、学部・学科選択、大学選択などの意識付けを図るために、3年生に対して実施している高校が多いようだ。だが、同校では早くも1年次から年2回開催される

「講演会の感想はもちろんだが、夏休みの職業・学問レポート、秋の学部・学科レポートなども、『学べる大学探せる事典』(数社刊)などの進路情報誌を生徒に与えた上で、『進路学習ノート』に記入、提出させています。教師は、生徒の書いたものを読むことで、より深く生徒の状況を理解することができま

学科、大学についての生徒の意識付けなどが大きな話題となります」(松尾先生)

を多くもらうほど、生徒に声を掛けやすくなるものなんですよね」(渡辺先生)

生徒の意識が高まる

個々の生徒の状況が議論の対象となるため、進路連絡会の事前準備として、各クラスでは生徒の書き込んだ『進路学習ノート』などを前にして、担任による面談がその都度行われる。言わば、これは会議に向けての情報収集の場だ。そして、進路連絡会でそれぞれの担任が得た指導のノウハウは、事後面談を通して生徒個々に

面談を行い、教師から自分の状況に合ったアドバイスをもらえば、生徒は自分の進路について考えざるを得なくなる。講演会などからいろいろな刺激を受けた生徒に対して、面談で個別に働きかけて、自立を促していく。これが同校における進路指導の大きな特徴と言えるだろう。



松尾敏実
88年度は第1学年主任を務め、89年度から進路指導主事、進路指導、同校担任12年目。「社会のリーダとして活躍する人材の育成に留意した指導をしていく」



渡辺孝一
89年度は第1学年主任、英語担任、同校担任11年目。「生徒と人間同士の付き合いを大切に、彼らの潜在能力を最大限に引き出す指導を心掛けていく」

佐賀県立致遠館高校

還元される。これは生徒個別の問題を解決するためのアドバイスを送る場と言えるだろう。

たいという強い気持ちがないと、最後まで頑張れませんから」(松尾先生)

「連絡会では一人ひとりの生徒についての話をするので、どうしても時間はかかりますね。でも、そのおかげで、自分自身の進路について具体的なイメージを持っていない生徒には『こいついっしょのを使って調べてみては?』などと、より具体的なアドバイスをすべての教師が行えるようになるのです。我々も他の教師から情報

同校では、1年次10月の進路連絡会前後の面談までに、ほとんどの生徒が文理の志望が明確になり、志望学部まで挙げられるようになる。「最近、自分の力を客観的に評価できず、自分の可能性が分からない生徒が少なくなっています。だから、教師が少し引張ってやらないといけないのでは」と思っています」(松尾先生)